

## 第1回 ライトノベル作法研究所主催 大夏祭り大会 選評評価シート

作品名：「365日の喪失」

テーマ：「いるのにいない美少女」

キャラクター

70

ストーリー

70

テーマ(設定)

67

文章力

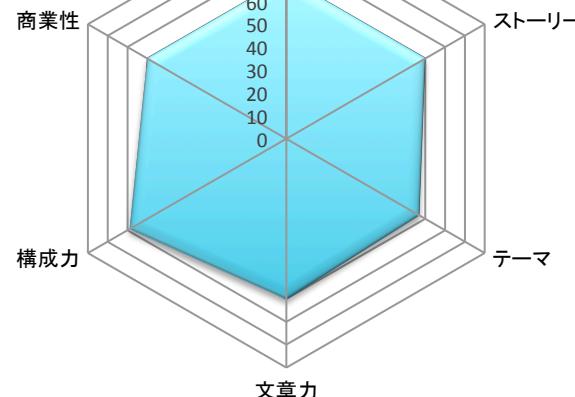
70

構成力

79

商業性

70



・細かい点

△「一日一人、同じ学年の誰かから『松野実花』という存在が消える」という文章がパッと読んで意味が頭に入ってきてにくい。(分かりにくい理由を強いてあげるなら、①「消える」という言葉が自動詞で、かつ具体的な意味がよく分からないから。②「誰かから」は主文の主語に対して動作を行っているのが「誰か」でないと使えない副詞節だから?)「誰かから受け取る」「誰かが話した」や「誰かから聞いた(誰かが話した)」など。(主語があとの方につきてるから)ある意味この文章がこの作品の全てなので、せめてここだけは分かり易い文章になおしていきたいと感じる。例えば一度分かり易い文章での説明を挟んでからこの文章を提示するなど。「一日一人ずつ、同学年の誰かが『松野実花』を忘れていく。誰かから『彼女』が消えていってしまう」など、設定を読者に刷り込ませるための反復もこの際あり気がする。

○「俺には朝、目が覚めるとすぐにやることがある。」この文章を作中で繰り返し使用している構成が巧い。「俺は、松野のことを忘れない様に毎日頑張った」などと書かれると最悪、一方でこうして忘れない様に努力している様を具体的に反復して書かれると非常に面白い。そして反復表現からの「トイレ」が構成としてもストーリーとしても非常に美しい。+4

○「んびやー！」がいい。

△「『松野実花』を認識できなくなる現象は、同じ学年に限られている」この設定をあえて提示する必要があったか? というのも途中の看護師の夢の話が、「いずれ人から認識されなくなる女の子が看護師という道はない夢をもっている」という優しさ兼面白さを含んでいて、この設定はその可能性をなれば無理に排除してしまい、面白さは減ってしまうのではないかだろうか。(それに加え先輩や後輩や先生には見えることにしてしまうと、例えば彼らが廊下で松野のすれ違い「松野さんこんにちは」的な発言をするたびに松野と同学年の生徒の間では「みんな誰に挨拶してるの?」と感じるだろうし、そうなると学年全体で「私達には見えない松野」という人間がいる」的な噂が流れないので等、本当に色々と面倒臭くなってくる。なのでこそ松野はほぼ全ての人間から認識されておらず、唯一見えていた同学年の人間も松野が見えなくなりはじめているくらいの方がすっきりはするのではないか?)

・総評

「いるのにいない美少女」というテーマの処理方法に非常にセンスを感じた。正直、少しずつ周りから認識されなくなるというヒロインという設定を思いついた時点である程度勝ちが決まった感はある。短編という制限の中でその設定を十二分に生かしきった点も評価が高い。正直これという批判すべき点が見当たらぬが、強いて問題点あげるとなるならばもう少しオリジナリティが欲しい。周りから認識されないヒロイン(もしくは周りを認識できなくなるヒロイン)ネタは既にかなり使われている感があるので、この作品にしかない強烈なオリジナリティがあればなお完璧であったと感じる(特に疊代行人のAnotherと比較されるとかなり痛い。向こうはヒロインが周りから見えていないのは「いないもの対策」で見えてないことにされているからという面白いかつ納得のいく整合性がある。しかしこちらでは本当に松野は見えてない上に見えなくなる理由も分からず、しかも同学年以外には見えているからそれによって生じる齟齬はどうなるといった欠点は何も解決しておらず整合性がない(Anotherを読んでいなかった場合分かりにくい例で申し訳ありません))。というわけから、多少無理矢理感があつてもよいから、まわりが松野を認識できなくなっていく現象にオリジナリティのある理由をつける等して、整合性とオリジナリティという二つの不備を補つていけば良かったのではないかと感じた。ただその点を除いた、例えば文章力や構成力などには一切の不備を感じない。この筆力で長編を書けるのであればプロ作家を目指して欲しいと感じる。

合計加点ポイント: 4

総得点: 426 / 600

B方式総合得点: 30646 点